



デザイン
坂川朱音

139 | 「これ」だけではないことをみんな知っている

大熊一夫さんの『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』（岩波書店）を読んだ。感想を一言でいうなら「愕然とした」である。

この本の刊行は2009年。わたしの手元にあるのは17年版で14刷である。はつきりいつてきわめて地味な内容なのに、これほどのロングセラーになっているのは、中身があまりにも衝撃的であるからだろう。

なんといってもびっくりするのは、日本の精神病病床数が1993年は35万床という記述で、世界の精神病患者のためのベッドの約2割が日本に集中しているらしいのだ。ちなみに、大熊さんの最新のレポートではその割合はさらに増して「ベッド約30万床」で「世界の精神病棟ベッドの37%！」となっている。ベッドの数は自体は若干減ったものの、割合は激増しているのである。それはなぜか。本書の27頁には、「人口1000人当たりの精神病床数の国際比較」というグラフがあつて、1970年頃には日本とほぼ同じか、もしくは多かった欧米各国（スウェーデン、アメリカ、イギリス、イタリア）の病床数が劇的に減少している様子がわかる。欧米がおよそ30年で5分の1か、10分の1（イタリアはほぼゼロ）に減っているのに、日本はほんの少しだけ増加、もしくは横ばい。ならば、割合も増えるに決まっている。これがいまでも続いているのだから、そのうち、

「世界の精神病病床の半分は日本！」

「世界の精神病病床の8割は日本！」

「世界の精神病病床、ついに日本がコンプリート達成。おめでとう、ニッポン！」

というニュースが飛び込んできても不思議ではない。っていうか、大丈夫なのかこの国。

おそろしいのはそれだけではない。

「平均在院日数も三二〇日（二〇〇六年）で、世界のなかでは絶望的に長い」のである。

というわけで、インターネットで調べてみると「OECD加盟国 平均在院日数精神病床」では、日本は資料がある1975年からずっと320日くらい（注1）。他の国は、ほとんど50日以下！

さらに「退院者の平均在院日数 2005年」

というグラフ（注2）を見ると、デンマーク・アメリカ・フランス・イタリア・オーストラリア・カナダ・スウェーデン・ドイツ・オランダ・イギリスでは平均が18日。日本は約300日！

ええっ？ 目をこすってグラフを見ました。

18対300です。他の国に比べて、日本だけグラフがグイーンと突っ立っています。もう、「日本とそれ以外全部」の世界が出現している。

ベッド数がめちゃくちゃ多くて、在院期間がめちゃくちゃ長いということは（ベッド数×在院期間＝患者である正味時間）「世界で精神病患者と認定されている人間はほとんど日本人」ということになるのではないだろうか。もうこのあたりで、わたしはずっとこめかみをおさえ

て突っ伏したままだ。

考えられる結論は、日本人はみんな精神が異常なのだ……なんてわけがない。では、なぜ。その原因についても本書で詳述されている。

簡単にいうなら、「今日の医療法は一九四八（昭和二三）年に制定された」のだが、第四条の七に「主として精神病、結核その他厚生大臣が定める疾病の患者を収容する病室を有する病院は、厚生省令で定める従業員の標準によらないことができる」と定めた。ざっくりいうと、特定の疾病では、「標準以下」の施設や人員でもオーケーということなのだ。この施行令は、「粗悪病院開設」の呼び水となった。そのもつとも悪質な例が「精神病院」だったのである。

大熊さんはこう書いている。
「これで人手や食費をけちるほどに利潤があがる……仕組みができあがった。これが『精神科特例』である」

その結果、「精神科医ではない医師、たとえば産婦人科医が精神病院を開設することにも、いや、医療とは全く無縁の投資家が精神病院のオーナーになるのでさえ、なんらの歯止めもかけようとしなかった。だから、ひと儲けを企む志の低い事業家がいっぱい、この業界に参入してきた」のだ。

そんな連中は、やって来た患者を薬づけにした。あるいは、ろくな治療もせず部屋に監禁した。そうすればするほど「儲かる」からである。

しかし、家族は文句をいわないのだろうか。残念ながら、多くの家族は、精神を病んでいる（と思われる）人間を引き取ってもらえて喜んだのである。こちらで「厄介払い」、あちらでも「儲け放題」。その結果が、冒頭でも書いた、世界の精神病病床がこの国に集中するようになったという事実なのである。

「精神病院を捨てたイタリア」のきつかけを作ったフランコ・バザーリアは、およそ60年前、精神病院の現状を見て、「もの」扱いられている患者たちを救おうと決意した。「精神病院」という存在そのものが、患者を悪化させていることに気づいたのである。バザーリアたちが、どのようにイタリアから精神病院をなくしていったかを詳述する余裕は、わたしにはない。だが、彼らが「精神病の患者をひとりのかけがえない人間として扱い、社会に復帰させ、社会の中で治療してゆく」と考えたことは、書いておきたい。

さて、大熊さんの本を読みながら、わたしはずっとモヤモヤしていた。なんだか知っているような光景だったからである。

大学で教えていた頃、ゼミの学生が「卒論」のために、ある特別養護老人ホームへの「潜入取材」を試みた。あえて書かないがたいへん有名な老人ホームチェーンの一つである。諸般の事情で書かない。そこで、彼は老人たちの世話

をしていた。そして「自分も絶対に入りたくないし、祖父母や両親も絶対に入れない」と歎いた（というか話しながら泣いていた）。というのも、その老人ホームでは、職員の数を減らし（もちろん経費節減のため）、そのため老人たちが動き回っては困るので、夜は縛りつけていた。彼がいちばんショックを受けたのは食事で、あらゆる食物素材を（ゴハンもみそ汁も野菜も魚も）ミキサーにかけてドロドロにした流動体をチューブのようなもので、老人たちの口に流しこむことだった。

「人間の扱いじゃないんです。あれなら、ベルトコンベアーの上を流れてくるエサを食べるニワトリの方がまだマシです」

「役に立たない」とされた者たちを放りこみ、公費によって「生かさず殺さず」収容しつづける施設は、この国にたくさんあったし、いまでもある。刑務所、障害者施設、出入国管理局、ハルセン病患者の収容施設……。

もちろん、中には立派な施設もあるだろう。けれども、その多くは「人権無視」と国際組織から批判を受けても、誰も変えようとはしない。そして、わたしたちは、それを「噂では知っている」のに「見て見ぬふり」をするのである。もしかしたら、わたしたちもいつか、そこに送りこまれるかもしれないというのに。

たかはし・げんいちろう 1951年、広島県生まれ。作家。この連載をまとめた『だいたい夫が先に死ぬ これも、アレだな』が好評発売中。